拡大版

Vol. 89

桐塑頭

— とうそがしら —

節句人形 素朴なギモン

雛人形の第一印象はお顔と言っても過言ではありません。美人顔、可愛らしいお顔など現在はお顔の種類もさまざまです。
そのお顔を「頭（かしら）」と呼び、日本人形の頭には主に江戸時代から続く伝統技術で作られる桐塑頭と、現代の技術でさらなる量産が可能となった石膏頭があります。今回は桐塑頭に焦点を当てて解説します。

生地抜き

昭和中期頃まで盛んだった桐塑頭

練（ね）り頭とも呼ばれる桐塑頭は、江戸時代中期頃に製造が始まったと言われている。上巳の節句に雛人形を飾るという、江戸時代初期に新たに起こった風習は、上流から町民へ、大都市から地方へ広がっていき、江戸時代中期に初節句の風習が生まれ一層盛んになっていった。

当初、頭は木彫が主流であったとみられるが、それでは量産ができないため、型抜き可能な技法として開発されたのが桐塑だった。桐塑は桐の木の粉としょうふ糊※を混ぜたもので、頭の土台となる。そこに胡粉（ごふん）を塗り重ねて完成するのが桐塑頭だ。胡粉について名古屋節句飾（頭部門）の伝統工芸士である株式会社味岡人形の味岡寛樹さんに聞いた。「胡粉の主な原料は貝殻の粉です。その粉と、膠（にかわ）と呼ばれる動物の皮膚やせき髄から採れるゼラチンでできた天然の接着剤と混ぜて完成する塗料が胡粉です。桐塑頭は胡粉を塗って乾かすという作業を繰り返しますが、工程によって貝殻の粉の細かさや、膠の濃度（量）などを変えて作ります」。胡粉は夏の暑さや湿気が大敵で、冬の低温時も材料の調合は困難を極める。「職人の経験と勘、熟練の技が必要とされます」（味岡さん）。

胡粉を塗って乾燥の作業を繰り返す

工程を簡単に説明すると次の流れになる。

【前半】桐塑頭の工程

①生地抜き　頭の土台作り
②目入れ　ガラスの目を入れる
③地塗り　胡粉を練って塗る
④置き上げ　固く練った胡粉で目と鼻と口を盛り上げる
⑤中塗り　中間層の塗り作業。6～8回塗り重ねる
⑥上塗り　仕上げの胡粉を塗る作業でとりわけ上質な貝殻の粉と膠を使用。6～8回塗り重ねる

④置き上げの胡粉が乾いたら、小刀を使い、目、鼻、口の形を彫刻する。⑤中塗りの表面がきれいになったら再び小刀で目、鼻、口を彫刻し整える。続けて、②目入れで入れたガラスの瞳を出しながら注意深く表情を表現。二重まぶたも小刀一本で彫る。さらに鼻と口の部分も細かい作業を施す。

「小鼻、鼻の穴、唇も丁寧に彫刻で作り上げていきます。こうした作業は桐塑頭と石膏頭の工程の大きく異なる部分であり、数ある工程の中で最も難しい仕事です」（味岡さん）。

※しょうふ糊…小麦粉から抽出されたデンプンが原料

目鼻口の彫刻

胡粉塗り

江戸時代から伝わる伝統的な技術で作られた桐塑頭

画像提供／株式会社味岡人形

石膏頭は技術に左右されない良い頭を量産できる

雛人形の頭には桐塑頭の他に、石膏頭というものがある。江戸から続く桐塑頭は高い技術と完成までの時間がかかるため、量産することは難しい。そこで昭和戦後に石膏頭の技法が創案された。現在、雛人形の頭のほとんどが石膏頭を採用していると言われている。味岡さんは石膏頭の特徴をこう話す。「当社は石膏頭を製作していませんが、1970 年頃から雛人形の頭として主流となっています。シリコンの型を使用するため、職人の腕に左右されることなく、良い原型ができれば、良いお顔を安定して量産することが可能です。早く仕上がる上に正確に製造できる。石膏頭の最大のメリットだと思います」。

石膏頭は桐塑頭に比べて製作工程が少ないため完成までの時間が短縮される。石膏頭はシリコンの型に流し込むと、目、鼻、小鼻、口、歯、二重まぶた、髪の毛を植える溝などもシリコンの型通りに表現される。「桐塑頭でいう置き上げに当たる部分。桐塑頭はこの作業が表情に影響します。1㎜でも違えば目指していた表情と違ってしまうため私たち職人は緊張する作業です」（味岡さん）。

工程の前半に引き続き後半は以下の通り。

温もりを感じさせる顔立ちを表現。光る職人技

【後半】桐塑頭の工程

⑦彩色　上塗りの終了後に以下の作業をする
- 目の上に乗った胡粉を小刀でさらう
- 絹毛を植えるための溝を彫り、筆と墨を使って眉毛、まつ毛、髪の毛の生え際を描く
- 口紅などの化粧を施す
- 口の中に小さな舌を表現し、歯を胡粉で1本1本作り、筆と墨を使用してお歯黒にする

⑧毛植え　結髪。絹毛に糊を付けて丁寧に植え、結髪をして桐塑頭のお顔は完成

桐塑頭は 100 年以上もつと言われている。「石膏は表面に塗料を貼り付けているイメージで、剝がれやすいと言われています。桐塑頭は塗り込んでいますから、耐久性があり、長い間愛でていただけます。20 年 30 年と経過した味わいは格別。表情に温もりと深みがあり、堂々としていると感じます。艶や立体感も桐塑頭ならではです」と胸を張る味岡さん。

江戸時代から続く桐塑胡粉仕上げの技術を伝える職人が少なくなった今、桐塑頭はますます希少価値がある存在だ。

取材協力　味岡寛樹さん（株式会社味岡人形 三代映水）／監修　林直輝さん（日本人形文化研究所所長）